

同人雑誌の昔と今

志村有弘

での配信も考えられる。また同人雑誌全体では同人誌評を載せている『三田文学』や『季刊文科』などを大切にすることである。同人雑誌批評家も育てなければならぬ。私事で恐縮だが全国の同人雑誌に目を通すのはかなりの時間を要する。若手批評家を育てるべきだ。いま文学全体を考えることが、同人雑誌の未来にかかっている。私は未来を考えるときに、真つ先に頭に浮かぶのはレイ・ブラッドベリの『華氏451度』と、浮かぶのはレイ・ブラッドベリの『華氏451度』と、同作を映画化したフランソワ・トリュフォー監督の映画である。本を読むことを禁止された社会で、本を持っていると焚書に遭い、読書好きな人々は森に隠れ住み、ひそかに読書を楽しむ、という話だ。映像社会の到来と、考えることをやめる愚民政策を六十七年前に予兆している。現代は強権的に権力が、読書や文学に触れることを禁止はしない。だが文学も含め、哲学、思想を抑制しようとする意思は明確である。効率優先の社会のために、人々が自ら進んで本や文学を棄て、自由を放棄するように仕向けている。自ら自由を放棄する、ドストエフスキーが「大審問官」で提起した問題だ。未来とは「未だ来たらず」の意味。良くも悪くも未来はいまの書き手にかかっている。

同人雑誌は商業出版にできない、一歩先を行く文学を生みださねばならない。

入るといふ。この第七期だけを見ても、江口宣のキリスト教小説「イエスよ涙を拭いたまえ」、また、波佐間義之の社会派小説「どくだみ」・「黒い赤ちゃん」など一連のカネミ油症事件をテーマとした話題作が掲載されている。江口の作品「イエスよ涙をぬぐいたまえ」は、優秀作として「文学界」に転載されたが、私もこの作品について、「紙数をいくら費やしても論じることができない」と評した記憶がある。

葉山修平（故人）は、カルチャーセンターなどで小説作法を指導し、それを母胎として誕生した雑誌のいくつかが今も続いており、一つの葉山山脈を形成している感がある。

今、同人雑誌「遠近」・「街道」・「文芸復興」などには、いつも心に残る作品が掲載されている。難波田節子（遠近）・木下径子（街道）・堀江朋子（文芸復興）をはじめ、同人たちの切磋琢磨もあるのだろうが、この雑誌には、書くことに対する真摯な姿勢の人たちが所属しているのである。少数の同人で頑張ってきた「残党」も五十号近くまで到達したと記憶するが、同人の高齢化に苦勞しているらしい。年齢の近い仲間で構成した同人雑誌の場合、高齢化の問題がいつまでも。大所帯

古い話であるが、昭和十三年（一九三八）九月、第二期「九州文学」が発刊された。その翌十四年、阿蘇藤蔵「海に憑かれて」（六月、芥川賞候補）、勝野ふじ子「蝶」（七月、直木賞候補）、矢野朗「肉体の秋」（八月、芥川賞候補）、劉寒吉「人間競争」（九月、直木賞候補）、岩下俊作「富島松五郎伝」（十月、直木賞候補。後に「無法松の一生」と改題）、原田種夫「風塵」（十一月、芥川賞候補）（六月とかの記述は「九州文学」に作品発表の月）と、同人雑誌「九州文学」から連続して芥川賞・直木賞候補作が出た。よくぞこうしたことが起こったものだと思う。原田種夫は『記録九州文学』（梓書院、昭和四十九年）で「一つの同人誌から五人も芥川、直木賞の有力候補に上ることは大へんなことだ」と言いながら、今と違って当時は「なんのこともなかった」と記しているのも面白い。それから長い歳月が流れ、同人雑誌掲載の作品が文学賞に結びつくのは、今は困難な時代となってしまった。火野葦平らが作った同人雑誌「九州文学」は、今、第七期が終了して第八期に

になれば、運営には大変な労力を要するであろうが、北陸から出ている「禱」（池田瑛子主宰）、東京の「潮流詩派」（麻生直子主宰）などは、大所帯ではないようだが、着実に発行し続け、「禱」の中村なづなは透明感のある心に染み透る作品を書き続けている。「詩霊」などに古典を踏まえた作品を書き続けている大掛史子も努力の人だ。現在、最も活躍している詩人のひとりである、たかとう匡子も最近、「時刻表」という同人雑誌を出し始めた。これも同人雑誌の魅力、面白さの一端を示すもの。

様々なジャンルの作品が掲載されているから雑誌なのであるが、ともあれ、詩・短歌・俳句だけの雑誌が多い。しかし、一部を除いて、韻文関係の単行本は、殆ど自費出版であることも現状だ。そうした中で、「飛火」の中野完二のように「へび」（蛇）の詩だけを書き続けている特異な詩人もいる。自分の特色を示す作品を書き続けることも肝要かと思う。私は、同人雑誌には、小説や詩歌とは別に、ある作家や作品に関する思いがけない資料が掲載されているのに出会うと、深い喜びを感じる。これもまた同人雑誌のひとつの存在意義を示すもの。また、「吉村昭研究」のように、一人の作家に関する研究同人誌も貴重である。

昔、明石敏夫という作家がいた。大正時代末期の話